



監修 〓 桑田忠親 / 村上元三 / 尾崎秀樹

山岡莊八全集 46

明治天皇  
(二)

山岡莊八全集 46

明治天皇(二)

著者 山岡莊八

装幀 加山又造／蟹江征治

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二―二二  
電話 東京(〇三)九四五―二―二二(大代表)  
振替 東京八―三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社  
製本所 大製株式会社  
製函所 株式会社岡山紙器所

第一刷発行 昭和五十九年十一月二十六日

定価 一六八〇円

©一九八四 藤野稚子 ISBN4-06-129300-1 (0) (文芸)  
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り  
ください。送料小社負担にてお取替えします。

## 目次

図説・明治天皇（カラー）

統碧血怒濤の巻

孝明帝崩御の巻

五

卷末特集  
日本剣客列伝〈10〉

榊原鍵吉

津本

陽

三七九

別刷 タイム・トラベルの楽しみ〈46〉

宮脇俊三

插  
繪  
  
三  
井  
永  
一

# 明治天皇 (二)

統碧血怒濤の卷  
孝明帝崩御の卷



続 碧血怒濤の巻





## 彦根の決断

岩瀬忠震が、越前の松平慶永に秘かに手紙で幕府の「——天朝輕視」を訴えているところに、無断調印の責任者である大老井伊直弼はいったい何を考え、何を成そうとしていたであろうか？

直弼はどこまでも周囲の意見に押しきられ、本意ながら無断調印の止むなきに至った形をとっている。

しかし、それはどこまでもうわべのことで、この時すでに彼はこの調印の結果がどのような事態になるかを読み尽し、これに対応するあらゆる手段を胸中に組立てていた。

おそらく岩瀬忠震が、松平慶永と通じていることも、水戸の斉昭が激怒して反撃を開始することも、みな計算に入

れていたに違いない。

或いは心中では、彼の政治手腕を、未知のものとして侮っている人々に、

「——今に見よ！」

と、ひそかに鬪志を燃やしていたのかも知れない。

とにかく彼は、松平忠固のような世間知らずの独善家でもなく、堀田正睦のような大名育ちのお人好しでもなかった。

彼は、十九日に調印を終るとその翌日から、いささかも迷いのない的確な足どり、自分のめざす方向へ歩みだした。

二十日には、まだ無断調印を知らない水戸の斉昭から、もう一度勅許の奏請に努むるよう意見書が出されて来たが、そうしたものは一顧も与えず、二十一日にはさっきと京都へ向けて「——宿次奉書」を発送していった。

一筆啓達いたし候。外国おん取扱いかたの儀について、お使い備中守（堀田正睦）をさしのほせられ、いさい言上におよび候ところ、勅答のおもむきもこれあり候につき、なお又御三家以下の諸大名へおたずねこれあり、おいおい差出し候ご答書など、觀覧にいれ、そのうえご処置これあるべき思召しのところ、もはやアメリカ条約お取結びこれなく候ては、成りがたき場合に立ちいたり、

実々やむを得ざる次第につき、再応仰せすめられ候日時もこれなく、よんどころなくご決着相成り候は、深くごしんしゃく思召され候得ども、先般仰せすめられ候趣きをもって、今度び条約おん取りかわせこれあり候。右おん余儀なき次第、委細は別紙の通りに候。この段先ずは取りあえず、よろしく奏聞あるべき旨仰せ出され候。恐惶謹言。

六月二十一日

脇坂中務大輔安宅 判

内藤紀伊守信親 判

久世大和守広周 判

松平伊賀守忠固 判

堀田備中守正睦 判

広橋大納言殿

万里小路大納言殿

そして別紙の方へは、例のイギリス、フランス、ロシアなどの軍艦がやって来る事情をのべて、向後沿岸の防備には充分注意するゆえ、ご心配なさらぬように主上に奏聞ありたいという、いとも簡単なものであった。

この奏書の連署が五老中だけになっているのは、これまでの責任は堀田正睦にあることを示そうとしているもので、その翌二十二日には、井伊直弼は改めて日本中の一万石以上の大名に建白書を差出すように命じていった。

むろんこれとて一種のうわべの取りつくろいに過ぎない。

すでに条約を結んでしまつてから意見を求めたところで、主上のご心配なされてゐる衆議を尽した後の決定にはなりようがないからである。

「——これで事態は否応なしに前進する」

直弼はそう思い、そうするつもりなのに違いなかった。

彼は、在府の大名すべてを呼び出して、不在の者にもそれぞれこれを伝達するよう下命してから一転して直ちに人事の更迭にとりかかった。

今まで駿河奉行だった大久保忠寛（後の一翁）を禁裏付きとして京都に急行するように命じ、直弼の腹心とも言うべき小笠原長常を京都町奉行に任命した。

京都において先ず彼の威令の行きわたるよう、まっ先に布石したのである。

続いて江戸においても跡部甲斐守の町奉行を免じて石谷穆清をそのあとに据えた。

京でも江戸でも、不平を持って騒ぐ者があれば容赦はせぬぞという構えである。

だが、世間の人々が「あっ！」と言つて声をのんだのは、その翌日二十三日の老中松平忠固と堀田正睦の罷免であつた。

松平忠固が、井伊直弼を大老に推薦しておいて、自分で

実権を握ろうとしていたことはすでに書いた。

直弼は、それを片腹痛いことに思っていたのに違いない。

二十一日。宿次奉書に城中で老中たちに署名させると、

直弼はそのまま將軍家定を大奥にたずねていって、松平忠固を老中の列に加えておいたのでは、禁裏の風当りがいよいよ強くなるゆえ、讎首かぐしゅしたいと申出た。いや、それだけでは家定に理解出来ないかも知れないと思い、忠固は、直弼を推薦しておきながら、直弼が意のままにならないと知ると、こんどはその甥にあたる姫路藩主酒井忠宝を大老にして、自分で実権を握ろうと画策し、陰謀していると告げていった。

家定がおどろいて、直弼に同意したのは言うまでもない。そして、こんどは家定の方から、ついでに堀田正睦もやめさせてはどうかと言い出したと伝えられている。

そうした内部の事情はとにかく、井伊直弼が、宿次奉書に忠固や正睦に署名をさせると同時に、返す刀で彼等を讎首かぐしゅしてのけたことは事実である。

それも、わざわざ當中へ呼び出して罷免を告げたのではなく、一片の書状による通告であった。

——書きつけを以て御意を得候。然ればご自分儀、思召しこれある間、登城さしとめ候よう上意にござ候。この

段お達し申し候。以上。

六月二十一日

松平伊賀守様

井伊掃部頭

堀田正睦も同文で、文中の上意は將軍の決定があったことを示すもので、どのように心外であっても異議の申出でなど思いも寄らない絶対のものであった。

そこでどちらもこれに謹しんで受け書をさし出した。

——御書きつけ拝見つかまつり候。然れば私儀、思召しこれあり候間、登城おさし止めなされ候むね、上意のおもむき仰せ聞けられ、かしこみ奉り、恐れ入り奉り候。右御うけ申しあげ奉り候。以上。

六月二十一日

井伊掃部頭様

松平伊賀守

堀田正睦はすでにこの事のあるのを予期していたが、松平忠固は、おそらく不意をつかれて、はじめて直弼の決断の恐ろしさを思い知ったに違いない。

こうしてまず登城を禁じておいて、在邸のまま二十三日に正式罷免、同時に新しく三名の老中が任命された。

太田道醇（資始）、間部詮勝（資勝）、松平乗全（資全）がそれである。

太田資始は遠江の掛川、間部詮勝は越前の鱒江、松平乗

全は三河の西尾の城主であったが、みなそれぞれ老中の経験をもっている井伊直弼の同志とも腹心とも言える人々だった。

こうして、井伊直弼は、日米通商条約を結ぶと同時に、一転して力の政治家として風雲の前に立ちただかつていったのだ……

## 慶喜の一石

井伊直弼が独断で条約に調印したと知ったとき、水戸派の人々はしばらく息をのんで言うべきことを知らなかった。

井伊直弼に、それだけの決断力があるとはまだ誰も思っていないかったのだ。したがってこれは松平忠固が、堀田正睦を説き伏せて、強行させたのに違いないと想像していた。

ところが、その忠固も正睦もあつと言う間に罷免されて、あれほど揉みに揉んで来ている未解決の勅許問題を、一片の宿次奉書であっさり片付けようとしている……：：：そう知った時、はじめて愕然とした彼等の視線は井伊直弼に集中した。

(これはただの牛ではないぞ！)

しかもその時には、もう直弼の周囲は、彼の意のままに動く人々で鉄壁の陣容をととのえ終っている。

そうなると、水戸派の人々の憤激が爆発せずにおさまる筈はなかった。

「——井伊はいつたい、朝廷を何と心得ているのであろうか。これで違勅は二つになったぞ」

その一つは言うまでもなく將軍継嗣の問題だった。主上は、ハッキリと名前は仰せられなかったが、この国家難難のおりゆえ、病弱の將軍に、年少の紀州慶福よしとみでは心もとない。それで年長の秀才……つまり一橋慶喜を立てるようという勅書を下されてあったのだ。

それをあっさり無視したうえに今度の独断である。しかもそれは頑迷な松平忠固でも追い詰められた堀田正睦でもなくて、実はすべて井伊直弼の専断だったとわかったのだ。

「——この朝廷輕視をそのまま許しておいては国家の大患になるだろう」

岩瀬忠震の手紙によって、松平慶永が顔いろ変えているところへ、挑戦するように、奉書の内容を井伊は諸侯に公示していった。

もうこの時には井伊直弼は、どのような反撃も非難も身一つに引きうけて立つ覚悟をしっかりと決めていたのに違

いない。

この宿次奉書の文面を見ていちばん激昂したのは水戸の斉昭と越前の慶永だったが、しかし、彼等よりもひと足さきに井伊直弼に、直接面談を申込んだのは、実は継嗣問題でうわさの中心に立たされている二十二歳の一橋慶喜であった。

慶喜は水戸斉昭の第七子で、御三卿の一つ、一橋家を継いでいるのだが、その母は有栖川宮の王女、登美宮吉子であった。そのうえ彼の内室もまた京の一条家から迎えている。

したがって、皇室との関係も浅からず、そのゆえにこそ、島津、山内などの諸大名から近衛、三条の両卿までみな彼を継嗣に推していたのだが……

彼は二十二日、宿次奉書が発表されるとその日、直ちに井伊家へ使者をやって直弼の来邸を求めた。

「——叡慮に反して調印したさえあるに、ただ一片の奉書で届け放し同様の処置をとるとはもつてのほか、申し談じたい儀があるゆえ、早々に来邸されたい」

一橋、田安、清水の御三卿は、尾張、紀伊、水戸の御三家と同様に、將軍家にあとつぎのないおりには、出でて宗家を継ぐという格別な家柄なので、大老といえども家臣扱いだつた。

したがって用があれば呼びつけてよいのだが、しかし、

慶喜は、もうこの時に、井伊直弼の決心が、並々ならぬものであることは明敏に察していた。

それにとにかく自分は継嗣問題で、井伊直弼にきらわれた本人なのだ。そのための私怨と思われるのが何よりも辛かった。

そこで更にこうつけ加えさせた。

「——もっとも都合もあらば、明日、當中で会っても差支えはない」

すると、直弼からは予期していたとおり、

「——ただいま御用の多いおりからとて、参上の暇がありません。ご登營下さらば目通り仕る」

と、返事があった。

直弼も、いよいよ来たかと肚を据えたのに違いない。彼もまた慶喜が並々ならぬ秀才で、実父斉昭さえ一目おいているのをよく知っている。いや、それほどの秀才が、わがままな斉昭の実子なので、これを宗家に入れることを嫌っていたのだ。

翌二十三日、約束どおり、慶喜は田安頼慶と一緒に登城して来た。が、この頼慶の方は、直弼にとつては大してこわい相手ではなかった。というのはずで直弼は、彼に、紀州慶福を宗家に入れることを打明け、ひそかに内諾を得ているからであった。

頼慶は城につくと、態よく慶喜に別れてしまったらし

く、直弼が、慶喜の詰めの間へ呼び出された時には慶喜ひとりであった。

直弼は相手が何を言い出しても、決してさからうまいと、改めて心に誓って平伏した。

慶喜はそれをジッと見おろして、おもむろに口を開いた。

「先ごろは大老職を蒙こうむられ、多難の今日、大儀千万に存ずる」

容姿も端麗だったが、その声も若々しい張りをもって涼やかに澄んでいる。

直弼は改めて一礼して、

「不肖のそれがし、思いもかけぬ大任を拜してひとえに恐縮いたし居ります。この上は、及ばずながら天下のため、粉骨碎身いたして、ご恩命に答え奉る所存にござりまする」

双方とも自分の敵がどのような器量の人物か、それを試そうとする鋭鋒をかくしての挨拶だった。

（あの斉昭の自慢の子なのだ。それに母は宮家の出、たぶん高飛車な出方で癩癩を叩きつけてくるに違いない……）

直弼はそう思っていた。そう思って慶喜の姿を見てゆくと、あくまで色白で、端麗な瓜実顔のこの貴公子は、案外なほどの静かであった。

「時に、大切な話に移るまえ、大老に訊ねておきたいこと

がある」

「何事でござりましょう。掃部頭かまもろ謹しんで承りまする」

「余の儀ではない。近ごろご養君のご沙汰があった筈じゃが、何れにおきまりか」

これはさり気ない言葉で、ぐざりと急所を突くものだった。直弼はぐっと胸をそらしたが、すぐには言葉は出なかった。

（これは聞きしにまさる斬れ味のお方だぞ）

「何れにおきまりか大老は知ってであろう。紀州どのでござるかな」

直弼の額へ一度に汗が噴き出て来た。

「さよう……さようで、ござりまする」

「さようか。それは何より恐悦至極じゃ。実は御継嗣の一条については、自分にも関係があるようなことを世間で風聞いたすにより、心苦しく思っていたが、それで大きに安心した。よくご輔導申上げられよ。自分もお為め專一に、幾久しくご奉公の所存である」

二十三歳と言えば、もはや子供ではない。それにしてもこの鮮やかな先手の打ち方は、まことにあっぱれなものもあった。

おそらく、継嗣問題などにこだわって私情でものを言うのではないぞ……という手きびしい前置きに違いない。

直弼は思わず襟を正させられた。

「仰せ承り、私も安心いたしました。ありがたく存じ奉る」

「さて、今日大老を呼んだのは、今度の調印の一条じゃが……足下もはじめから承知の上のことでござったか」

それ来た……と、直弼は、又両手を突いた。

「恐れ入り奉る」

「將軍家のお考えは如何？ 伺いずみの上のことか」

そう問いかけたのは宿次奉書に井伊直弼の名前が書いてないからだ。うかつに井伊を責めて、あれはわれ等のあずかり知らぬこと、すべて、堀田正睦と松平忠固の独断……それゆえ兩人を誡首しました……そう言わせぬための、用心深い布石であった。

井伊直弼とて、それ位のことの感じとれない人物ではない。内心ではいよいよその鋭敏さに舌をまきながら、  
「恐れ入り奉る」

また同じことを繰返して頭を下げた。

「ただ恐れ入るでは相わからぬ。察するところ、足下は不承知だったのを、備中や伊賀が、強いて取計らったのであらう。いかが？」

直弼はギクリとした。この貴公子は、そう言つて、自分の立場を一応弁護しておいて、それから正式に勅許を得て来いと言いだす氣に違いない。

そうなる、直弼は、ただ恐れ入るばかりでは済ませな

かった。

「一橋さまの御前ながら、掃部頭が恐れ入り奉る……と、申上げたのは、条約の儀、備中や伊賀ばかりでなく、それがしも同意致したものでござれば、恐れ入り奉る……と申上げましたので」

「ほう……これはもつての外のことを聞くものだ」

到頭英才は噛みつくような声になった。

「足下が反対しているにもかかわらず、備中と伊賀が強行した……と、思えばこそ、今日の多難大儀千万と申したのだ。ところが足下も知つて調印した……となればこれは一大事、將軍家に違勅の罪をおき申したことになる。それで大老としての輔弼の任、見事に果したと思われるや。」

さ、足下の存念をうけたまわらう

それはまことに理路整然とした駁論で、さすがの直弼も言句に詰まった。

と言つて、ここで見苦しく取乱すような直弼ではなかった。直弼は、静かに額の汗を拭き、いかにも困惑しきつた表情でもう一度、  
「恐れ入り奉る」

と、頭を下げた。

頭を下げながら、この相手の責め手を、理屈だけでは到底かわし得まいと思つと、

「私もその懸念がありましたので、精々こぼんでみまして。反対は私と本多越中のみ……なにぶんに多勢に無



勢、かつ着任間もないこととて事情もよくわかりませす  
 ……まことに恐れ入ってござりまする」

適当に弁解をまじえて、又平伏していった。このあたり  
 の柔軟さはさすがであった。

慶喜の口からホッと大きくため息がもれた。相手がただ  
 詫びるだけなので、せっかく声を大きくしてみたのだが、  
 振りあげた拳のやり場に困るとまどいだった。

「それに致しても、將軍家ご違勅とあれば、それこそ容易  
 ならぬ一大事じゃ。その一大事の奏上に、ただ一片の奉書  
 とはいかが？ ご軽蔑のすじに当るとは思わぬか。足下は  
 何と心得られるぞ」

「恐れ入り奉る。いずれ、大老か老中のうち、上洛致すよ  
 う計らいますれば、これまでの儀は、何とぞご宥願いあ  
 げまする」

これでは勢いこんで来た慶喜も怒りようがなかった。直  
 弼自身、いささかも責任回避のようすはなく、素直に過  
 をみとめて恐れ入っている。

「ふーむ。いや…自分はまだご奉公のためにかく申すの  
 み。自分への斟酌は無用にせられよ。そうか…そのおつ  
 もりならばよかろう。ただし、京都へは明日にも出立なき  
 るがよいぞ」

「はい。早速評議のうえ、仰せのごとく致しとう存じます  
 る」

「それがよい。では、せっかく参ったものゆえ、老中たち  
 を叱って参ろう」

直弼はもう一度うやうやしく一礼して退出した。

この秀才の怒りを巧みにそらし得ておそらく胸中では、  
 ホッとしたのに違いない。彼が退出してゆくと、入れ違い  
 に久世広周以下、奉書に署名させられた残留の老中たちが  
 顔を見合せながら入って来た。

## 鷹 と 鷲

井伊直弼は、これで先ず最初の征矢はかわし得た。しか  
 し、それだけで反対派の攻撃が済もうはずもなく、翌二十  
 四日の早朝には、外桜田の上屋敷に、松平慶永の訪問を受  
 けた。

その旨を用人が取次いで来たおりに、直弼は朝食を摂っ  
 ていたが、不快さをあらわに見せて、

「ご用ならば、當中でお目にかかると申せ」

前日の慶喜に対する態度とはうって代った強硬さであっ  
 た。

言うまでもなく、越前は家康の子秀康以来の親藩で、し  
 かも当主の慶永は田安の徳川齊匡の子が養子になって松平